

ロナルド・フィッシャーの妻

森田一三

日本赤十字豊田看護大学

The Wife of Ronald Fisher

Ichizo MORITA

Japanese Red Cross Toyota College of Nursing

キーワード (Key Words) :

統計学者, ギネス社, 歴史

Statistician, Guinness, history

はじめに

研究で用いる統計手法には考案者の人名を冠した名称を持つものも多い。「ピアソンの積率相関係数」をはじめとし、「スピアマンの順位相関係数」、「チューキーの多重比較」、「イエイツの補正（イエイツのカイ二乗検定）」、「クラスカル・ウォリスの検定」などが挙げられる。日本人の名を呼び名に持つ統計手法としては「林の数量化」、「赤池情報量規準 (AIC)」などをご存知の方も多いと思う。これら、数々の考案者の人名を冠した統計手法の中でも「フィッシャーの正確確率検定 (Fisher's exact test)」は知名度の高い手法の1つではないだろうか。この手法を考案したロナルド・フィッシャー (Sir Ronald Aylmer Fisher, 1890-1962) はイギリスの統計学者である。現在、私たちが研究に用いている基本的な統計手法の多くは19世紀後半から20世紀前半にイギリスにおいて考案されている。「ピアソンの積率相関係数」のカール・ピアソン、「t検定」のウィリアム・ゴセット、「スピアマンの順位相関係数」のチャールズ・スピアマンはいずれもイギリスの統計学者である。

「t検定」のウィリアム・ゴセットは「スチューデント」として知られているが、オックスフォード大学で学んだ後、ギネス社 (Guinness) のダブリン醸造所に就職している。このスチューデントことゴセットは統計手法を求めて、ロンドン大学のカール・ピアソンの下を訪れ、その後、同大学に籍を置いたロナルド・フィッシャーのところへも訪れている。この統計学が揺籃期を抜け出そうとする時代において、カール・ピアソン、ロナルド・フィッシャー、ウィリアム・ゴセットが密な関わりを持っていたことは、現在我々が用いる多様な統計手法が生み出されたことと無関係ではなかったと思われる。この時代はまさに統計学のカンブリア紀のようであり、統計学が多様性と実用性を獲得した転換期であったといえる。

そのような歴史を紐解く中で、ロナルド・フィッシャーの妻がアイリーン・ギネス (Eileen Guinness) という名であったことを知った時^{1,2)}、私の中でふと、ウィリアム・ゴセットの勤務したギネス社 (Guinness) とこの姓の一致は単なる偶然なのだろうか、という疑問が浮かびあがった。統計学を軸とした人々のつながりが、ロナルド・フィッシャーとギネスビール創業家を結びつける契機となる可能性があったのではないかと考えたのである。もし、私がこの疑問を当のロナルド・フィッシャーに投げかけることができたならば、フィッシャーは「それでは、その命題を検定してみようでは

ないか」とその手順を語りだしたのだろうか。それとも即座にその確率の低さを示し、私の仮説を棄却していただろうか。いずれにしろ、このような疑問を抱いた私は、その時、在外研究でロンドン大学に籍を置き、統計学発祥の地ともいえるイギリスを楽しんでいた。私は、彼らがどのようなところで生活をし、どのような環境で研究に取り組んでいたのか興味を持ち、統計学発祥の地での滞在を許されたことを好機として統計学者と縁のあった地を訪れた。本稿では私が巡った地を紹介しながら、統計学がロナルド・フィッシャーとギネス家のつながりをもたらしたのか、はたまた、これは偶然の一致であったのかを明らかにしたい。

偉才、多才のカール・ピアソン

統計学の歴史を語るのであれば、17世紀に、後に人口学と呼ばれる分野を創意し、はじめて生命表を作成したジョン・グラント (John Graunt, 1620-1674)³⁾にさかのぼるべきかもしれない。グラントもイギリス人であったことは、その200年以上後にイギリスで統計学が大きく発展を遂げることに幾ばくかの関係があるのではないかと思える。しかし、話をカール・ピアソンの時代から始めたいと思う。

私がカール・ピアソンを統計学者として強く認識したのは在外研究先にロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) を決めつつあった2005年の初冬の頃だった。もちろん関連を示すための手法としてのピアソンの積率相関係数はそれまでに幾度となく用いており、有用な統計手法として認識していた。ところが、思わぬ所でカール・ピアソンを再認識させられることになる。

このとき、歯科技工士専門学校の専修科で統計学の講義が私が担当するようになり数年が経っていた。専修科はすでに歯科技工士の免許を持つ者が更に学ぶためのコースである。学生たちはすでに本科で統計学の講義を受けていることから、再度同じような内容を聞かされるのは楽しくないだろうと考え、統計学の歴史を織り込んだ資料を作成し講義を行っていた。統計学も統計学の歴史も数年でそれほど大きく変わるものではないため、毎年同じ資料を用いていた。幾度か講義を行い、慣れたその資料を読み上げながら講義を進めていたのであるが、相関係数の説明の中で、カール・ピアソンの紹介の際に「……1884年から、ロンドン・ユニバーシティ・カレッジの応用数学力学科の教授と⁴⁾と読み上げたところで、私はカール・ピアソンが教鞭をとった大学を在外研究先にしようとしていることに気づいた。今まで統計手法を考案した人々が同じ世界にいたということさえ考えたこともなかったが、突然異世界とつながったように感じた。そして、言葉を失った。講義の最中に、である。本当に数秒は空白の時間があつたと思う。その間に、プリントの読み上げた部分を再度目で追っていた。そして、これまで幾度もこの文を目にしなが、全く気づいていなかった自分に驚いていた。

さて、カール・ピアソンとこのような出会いを果たした私は、在外研究でロンドンに到着した2か月後の5月末にカール・ピアソンが住んでいた家を訪ねた。7, Well Road Hampstead というカール・ピアソンが住んでいた住所はインターネットを検索すると容易に見つけることができる⁵⁾。Hampstead (ハムステッド) はロンドン北部の高級住宅街である。私はロンドンを南北に走る地下鉄線のノーザンラインのハムステッド駅に降り立つと、地図と方位磁針を頼りに探索を始めた。

駅を出るとハムステッド・ハイ・ストリートに連なるおしゃれな店々が目に入る。しかし、ウエル・ロードに向かうため、すぐにその大通りから脇道に入る。ハムステッドは高級住宅街なだけに、ヴィクトリア時代の建物が並ぶ美しい風景が続く。緩やかな坂を上り、住宅街の通りを方位磁針を頼りに進む (方向をよく見失う私はロンドン滞在中、常に地図と方位磁針を携帯していた)。途中、決して平坦ではなく起伏のある道を進むとウエル・ロードに出ることができた。この通りもこれまでの街並みと同様、重厚なビクトリアン・ハウスが並ぶ。この通りのどこかにカール・ピアソンの住ん



写真1 カール・ピアソンがユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン在任時に住んでいた建物



写真2 カール・ピアソンのブルー・プラーク

でいた家があるはずである。私はドアの上に示された番地番号を順に追いながら、番地7の家を探した。ウエル・ロードを歩いて程なくカール・ピアソンの住んでいた家が見つかった（写真1）。ありがたいことに玄関の横にはカール・ピアソンのブルー・プラーク（写真2）があり、ここでカール・ピアソンが暮らしていたことを教えてくれる。

ブルー・プラークとはロンドンを中心として、イギリス国内の著名人がかつて住んでいた家や歴史的な出来事があった建物に設置される銘板⁶⁾である。直径約50cmの円盤で、初期に設置されたものはこげ茶色であるが、多くは青地に白色の文字で表記されている。現在900を超えるブルー・プラークが設置されている。

カール・ピアソンの住んでいた家は左右対称な作りをしている。写真には写っていないが右側にも玄関がある。この建物はちょうど真ん中の壁をはさんで2つの家がくっついたセミデタッチという様式になっている。ロンドンではこの様式の建物を多く見かける。ピアソンの住んでいた建物自体に入ったことはもちろんないが、私がロンドンでお世話になった Sheiham 教授の自宅に招かれた際に、同様なセミデタッチの家の中を見る機会を得た。外見からも分かるのであるが、地下1階、地上3階の作りである。各階の建ちは一般的な日本の家屋より高く作られている。家の前の部分は空堀のように掘られ、地下への採光がなされている。これらの家は19世紀に建てられたものであり、その当時、地下室はメイドが居住し働く場であったらしい^{7,8)}。Sheiham 教授の自宅には階段が2箇所あり、1箇所は住人や客人が使用し、もう1箇所は使用人が使用するものだったと伺った。もちろん Sheiham 教授の自宅にメイドはいなかったが、19世紀初頭には中産階級はメイドを雇うのが一般的で⁹⁾、ピアソン家にもメイドはいたと考える。Sheiham 教授の自宅の部屋数がいくつであると言われたか記憶はないが、バスルームは3つあるとのことだった。ロンドン滞在中に同様な様式の家に招かれる機会が幾度かあったが、いずれの家もゆったりとした造りで、玄関と反対側には広い庭が広がっていた。

写真3は私が住んでいた家の前の通りである。この地域は1920年代に造られたとのことである。最初に私がこの通りを見たとき、赤い屋根に白い壁の家が整然と並び、いかにもヨーロッパらしい家並みだとうれしく思った。しかし、ヴィクトリア時代に造られたハムステッドの家並み（写真4）と比べてみると安普請であることに気づかせられる。

カール・ピアソンの家からユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）までは5.5kmほどの距離がある。歩いて大学まで行こうとすると1時間は優にかかるだろう。現在なら地下鉄のノーザンラインで行くのが普通だろうが、ノーザンラインの開業は1890年、ハムステッド駅の開業が1907年、大学に最も近いウォーレン・ストリート駅も1907年開業である¹⁰⁾。1884年にUCLの教授として就任し



写真3 著者がロンドンで借りていた家の前の通り

写真4 カール・ピアソンが住んでいた家の前の通り
(Well Road)

た⁴⁾カール・ピアソンはこの時、地下鉄で通勤することはまだできなかった。この頃は辻馬車の最盛期であり¹¹⁾、すでに、自動車も普及しつつあった時代¹²⁾のためこれらの交通機関を利用していたのかもしれない。

カール・ピアソンが教鞭をとった UCL は現在もウォーレン・ストリート駅の近くにある。1826年の設立時に建てられた建物は UCL の中核となる役割を担っているが、UCL は近隣の建物を校舎として利用することで拡張を続け、大学関連の施設は街の中に点在し、まるで町全体を大学のキャンパスにしようとしているかのようである。そしてこの設立時に建てられた建物の敷地を取り囲むように、さらに建物が建てられているが、その 1 つにピアソンの名が冠せられている建物（写真 5）がある。ピアソンの名はこのようなところでも語り継がれている。

余談ではあるが、UCL の近辺には重要な駅がいくつもある。その 1 つはイギリス北部やスコットランドへ向かう列車の発着するユーストン駅である。さらに、リーズなどのイギリス中央部、パリへ向かう国際列車ユーロスターの発着駅となる、セント・パンクラス駅である。そして、もう 1 つがキングス・クロス駅である。この駅は、イギリス北部、東部への列車も発着するが、J. K. Rowling の小説、ハリー・ポッターシリーズで hogwarts 特急の始発駅として登場し有名になった。この駅にあるとされる、架空の 9 と 4 分の 3 番線からその列車は出発するという事になっている。いや、キングス・クロス駅には本当に 9 と 4 分の 3 番線はあるのだが、私が入ることができなかつただけかもしれない（写真 6）。

さて、UCL には特筆すべき偉人がいる。UCL の創設に多大な影響を及ぼしたとされる、哲学者、ジェレミ・ベンサムである。没後すでに 180 年以上が経っているが「偉人がいる」と現在も存在するかのよう記したのには訳がある。先ほど述べた UCL の創立時に建てられた建物の南回廊の奥で、今もベンサムは大学を訪れる人々を見守っている¹³⁾。Auto-Icon と呼ばれる扉付きの木製ケースの中で、椅子に座っているのである（写真 7）。ベンサムが生きていた時代、イギリスでは外科学を学ぶための解剖実習用の遺体は教育施設や学生が非合法に入手していた¹⁴⁾。すなわち、墓から盗掘したり、貧民収容施設で死亡した引き取り手のない遺体を購入したりしていたのである。しかし、徐々に規制が厳しくなり遺体の入手が困難になる中、ついに殺人により遺体を調達する者が現れる。そのような背景の中、解剖のための合法的な遺体の確保にむけて法整備がすすめられることになる。この法案の審議のさなか、ベンサムは公開切断型解剖をするように遺言を残し亡くなる。ベンサムは医学の基礎は解剖学であり、解剖学の知識獲得には解剖が必要であることを見抜いていた。さらに死刑囚や自殺者が解剖に付せられていたことなどに起因する解剖に対する偏見をなくすべく目的もあった¹⁴⁾。そし



写真5 ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのピアソン・ビルディング



写真6 キングス・クロス駅の9と4分の3番線プラットフォームへの入り口

て、遺言で、解剖した自分の遺体をミイラにして木製のキャビネットに収めて、皆が見えるように保存することを望んだことで Auto-Icon がつくられたのである¹³⁾。

この Auto-Icon には逸話があり、現在でも大学の理事会開催時には Auto-Icon が会議室に移動され、参加すれども投票せずと議事録にジェレミ・ベンサムの名が記されているといわれている。しかし、この逸話は、UCL の公式ホームページで否定されている¹³⁾。

さらに付記するのであればこのベンサムの Auto-Icon の置かれている南回廊のすぐ西の中庭に置かれている、比較的新しい石碑について述べておくべきと思う。その石碑には表に日本語、裏には英語で明治維新の直前に英国に留学した伊藤博文、森有礼らの名前が刻まれている。これら多くの日本人留学生を受け入れた大学はこの UCL である。ベンサムの示した功利主義は自由主義・平等主義を掲げる UCL の開学の思想にも影響し、日本人留学生の受け入れの契機になったのではないかと考える。

さて話をカール・ピアソンに戻す。ピアソンは UCL で統計学に取り組むようになる以前には、中世のドイツ文学に取り組んでいたらしく¹⁵⁾、多才な面が知られている。決して統計学のみを追い続けていたのではなく、教養に富んだ人だったのではないかと思う。



写真7 ジェレミ・ベンサムの Auto-Icon

謙虚な努力家ウィリアム・ゴセット

1899年にアイルランドの醸造会社ギネス社に採用された青年がいた。カンタベリー出身でオックスフォード大学で化学と数学の学位を修めたウィリアム・ゴセット¹⁶⁾である。

ギネス社はアイルランドの首都、ダブリンにある。このダブリンという町は機会があったら1度たずねてみたいと思っていた町でもあった。なぜなら、大学の教養の英語で James A. A. Joyce の「Dubliners (邦題：ダブリンの人びと)」を通読したからである。英語の得意でなかった私の力不足ゆえか、この Dubliners は決してワクワクドキドキするような内容の物語ではなく、どこにでもいそうな、どちらかという、ちょっとやる気のないダブリンの人々の日常生活を描写した文学だったように記憶している。そんな文学作品を故米本義孝先生は、「ここは田舎なんだよ、いいかい、会話文は



写真8 ギネス社



写真9 ギネス・ストアハウスの入り口

方言で訳さなくてはいけない。名古屋弁で訳してみよう」と言い、私たち学生は戸惑ったことを覚えている。私はそんな講義がなぜか楽しかったと記憶している。文学作品から、ダブリンにはやる気のない人ばかりがいるという偏った情報を与えられた私は、ダブリンはどんな町なのだろうかという興味があった。

ヒースロー空港を発ち、ダブリン空港に着いたところでレンタカーを借り、宿泊予定のダブリン市内のホテルに着くと車を置き、ギネス社に向かった。ギネス社を創業したアーサー・ギネス (Arthur Guinness) は1759年にこの聖ジェームズ・ゲート醸造所を年45ポンド (約7000円) で9000年契約¹⁷⁾で借りた (写真8)。ギネス社は「ギネス・ワールド・レコーズ (ギネス世界記録)」を発行した会社でもあるが、創業時の逸話もギネス級のものである。さて、目指すは Guinness Storehouse である (写真9)。ここは元、発酵プラントとして使用されていたものを改装し、7階建ての博物館となっている。1階のエントランスから入り、ビールの製造工程が各階にて順に説明されている。私は会社の歴史を紹介するエリアを探していた。探し求めていたものは4階にあった。壁一面が年表となり、そこにゴセットのサインと写真を見つけた (写真10-12)。

ゴセットは醸造技術者として有能であったようで、その後、ロンドンに新設されたギネス社醸造所の所長として赴任することになる¹⁶⁾。実際ロンドンに赴任するのは1936年にパークロイヤル・ギネス醸造所が設立された時であり、当初ダブリンにいたゴセットは経験に頼ってきたビール作りの工程に科学的な取り組みを示していった。そんなゴセットはその当時、統計学の最先端にいるピアソンの下へ教を請うようになり、ついにはギネス社より1年間の研究休暇を得てピアソンのカレッジに赴くことになる⁴⁾。ここで、ゴセットは現在我々が用いている t 検定の基礎的な概念の発見を行い、ピアソンが編集に関わっていた *Biometrika* へ論文を投稿することになる。この時、ギネス社は機密保持のため、社員が業務に関わる研究発表をすることを認めていなかったことから、ピアソンの示唆により、「STUDENT」という著者名で論文を発表し、これが後のスチューデントの t 検定につながるのである。

このように、ゴセットはピアソンの下で後世に名を残すような発見をするのであるが、おそらく、本当に望んでいたものは得ることができなかつたのではないかと思う。ピアソンの考案した統計手法はもともと大標本を想定し、より試料の数を増やすことに努力が向けられていた⁴⁾。一方ゴセットはビール製造の現場でのデータ収集を前提としており、多数の標本を得ることが難しいことから⁴⁾、小標本でも有用な統計手法を捜し求めていたはずである。またゴセットは複雑なビール製造の工程を効率化することを想定しており⁴⁾、多数の要因の影響を解き明かすための統計手法を求めていたと考え



写真10 ギネス社年表



写真11 ウィリアム・ゴセット（中段右から2人目）

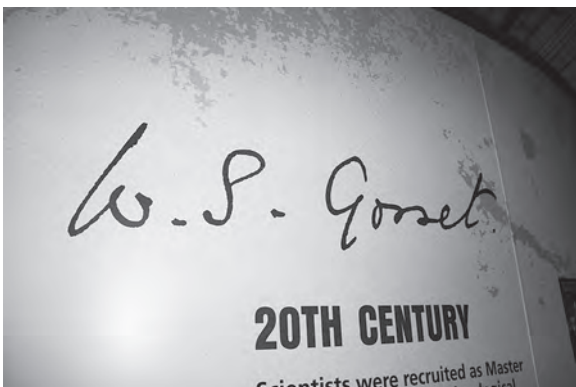


写真12 ウィリアム・ゴセットのサイン



写真13 ロンドン、パークロイヤル・ギネス醸造所跡

られるが、ピアソンらの興味はそのようなところにはなかったように思われる。ゴセットが多数の要因の影響を解き明かすための統計手法を知るには、さらに数年後、ロナルド・フィッシャーに出会う必要があったようである。

ダブリンで、ゴセットの足跡を確認し、ロンドンに戻った私は、ゴセットが赴任したロンドンのパークロイヤルにあるというギネス醸造所を探した。しかし調べた住所の場所に建物はなかった。その敷地の後ろにはギネス社を買収したディアジオ社の社屋があり（写真13）、その前に、崩されたレンガの山がいくつも造られていた。さらに調べたところ、ロンドンのパークロイヤル・ギネス醸造所は2005年に閉鎖されたのち解体された¹⁸⁾らしいことを知った。おそらく私が見たレンガの山は、パークロイヤル・ギネス醸造所の変わり果てた姿だったと思う。

幾何学的洞察力のロナルド・フィッシャー

ブルー・プラークの所在¹⁹⁾からロナルド・フィッシャー縁の地を知った。その所在はハムステッドのノースエンドウェイであった。インバーフォース・ハウスと名づけられたそのネオ・ジョージアン様式の邸宅は5エーカーの広大な緑地の丘の上に建ち²⁰⁾、圧倒的な優美さを放つ建物であった。Google マップで「NW3 7EU」のポストコードで検索すると見ることができる。ロナルド・フィッシャーはこの家で6歳から14歳頃を過ごした¹⁸⁾ようである。この家に住む以前はロンドン北部のフィンチリーに住んでいたようである¹⁹⁾が、美術ディーラーやオークション会社を営んでいた父親の事業が好調であり、この地で暮らすようになった。しかし、ロナルド・フィッシャーが14歳のとき、母が亡くなり、その後父の事業が傾き、再び転居したとのことである。現在この邸宅はいくつかに仕



写真14 インバーフォース・ハウス（道路側）



写真15 ロナルド・フィッシャーのブルー・プラーク

切られ住宅として使用されている²¹⁾とのことである。

ロナルド・フィッシャーのブルー・プラークはインバーフォース・ハウスの通りに面した塀にはめ込まれている（写真14, 15）。ブルー・プラークにはロナルド・フィッシャーが統計学者、遺伝学者であったと記されている。

インバーフォース・ハウスの入り口と思われる門の前に立った私は、敷地の中を窺った。しかし、この邸宅の入り口となる、鉄製の門扉は閉じられ、敷地内に入ることはできない。通りから見て反対側にあるはずの庭を見ることができないかと考え、塀に沿って歩くと、通りからわきに入る道が見つかったので塀にそって進んでみる。ゲートがあり、車は入ることができないが、人は通れるようなのでさらに進んでみると、しばらくして庭側に入れたことに気づく。庭を囲むように回廊が造られ、そこから中には立ち入ることはできないが、回廊越しに見える庭は充分に手入れがされていることが一目で分かる。その向こうにはレンガ色と白い窓枠のコントラストが美しい、ネオ・ジョージアン様式にのっとり左右対称に造形されたインバーフォース・ハウスが建っていた（写真16）。



写真16 インバーフォース・ハウス（庭園側）

少年期のロナルド・フィッシャーはこの緑豊かな美しい家と満ち足りた中で育つことで、後世に名を残すその才能を開花させたのだろうか。しかし現実には、違っていたようである。D. S. Salsburg は著書の中で、少年期のロナルド・フィッシャーを次のように書き記している。「彼は人生の敗北者だった。ひどく眼の悪い、病弱で孤独な子供として成長した」¹⁶⁾。このロナルド・フィッシャーの少年期の描写は、あまりにもインバーフォース・ハウスの整い方と対照をなしている。ロナルド・フィッシャーは幼少期から強度の近視であり、医師からは人工光の下で書物を読むことを禁じられていたのである^{4, 16)}。そして大学を卒業後、第一次世界大戦の際には近視ゆえに兵役に就くことを拒否されている^{4, 16)}。ロナルド・フィッシャーは彼が推進する、優れた人は何事においても優れているという優性思想により自分自身が否定されることになる。自然選択説と遺伝学を原動力に発展を続けたネオダーウィニズムの旗手であったロナルド・フィッシャーは統計学者であり、遺伝学者でもあったことをブルー・プラークは思い出させてくれる。ロナルド・フィッシャーが自分自身は自らが理想的とする全てにおいて秀でた優れた者とはなり得ないことに気づいたのは、もしかすると、この様式美を具現化

したインバーフォース・ハウスでおくった日々の中にあっただのではないかと思う。

しかし、ロナルド・フィッシャーの強度の近視は彼の数学の能力を飛躍的に高めるきっかけとなった。パブリックスクールに入学したロナルド・フィッシャーは日が暮れると、視覚を用いずに、頭の中で数学の問題を解く勉強法を行うことになる^{4,16)}。そしてそのことは、彼に並外れた数学的なセンスをもたらした。

この、常人を超えた数学のセンスは、ロナルド・フィッシャーの研究がカール・ピアソンの理解しきれない次元に達することで、両者の溝を深めることになる。バイオメトリカ誌の発行に影響力を持っていたカール・ピアソンはロナルド・フィッシャーの書いた論文の価値を見抜くことができなかつたばかりか、ぞんざいに扱うことで両者の関係は修復不能なまでに至るのである。このことは、我々に、論文を執筆するにはこれくらいの説明は省いても読者は理解できるだろうと考えることなく、できる限り丁寧に事象を説明すべきであるという教訓を与えてくれる。そして、あるとき、カール・ピアソンはロナルド・フィッシャーの能力に気づき、研究室に招こうとするが、カール・ピアソンと関係の悪化していたロナルド・フィッシャーはロザムステッド農業試験場のジョン・ラッセル卿の招きに応じて、その後数々の後世に残る業績を挙げるロザムステッド農業試験場に赴くことになる。

ロザムステッド農業試験場

ロザムステッド農業試験場はロンドンの北部、私の住んでいたヘンドンセントラル駅の近くから、車で30分ほど北上した場所にある。高速道路であるM1に入り、しばらく走ると緩やかな起伏のある牧草地の風景が広がる。緑色の牧草地に白色の点々が見えたら、大概は羊である。時折馬や牛がいることもあるが、ロンドンを出て5分も走ればそのような光景が広がっている。ロザムステッド農業試験場は現在名称をロザムステッド研究所 (Rothamsted Research) と名を変え、バイオサイエンスの一大拠点として運営されている²²⁾。



写真17 ロザムステッド研究所, センテナリービルディング

のどかな牧草地帯の中を通るM1をおりてしばらく走ると、ロザムステッド研究所の敷地に入る。右手にひととき古いラッセルビルディングを見ながら構内を進むと、その正面に優美な弧を描くセンテナリービルディング (写真17) が現れる。この建物がロザムステッド研究所の現在の研究施設の中心である。

私は車を降り、センテナリービルディングへ向かった。ただ、ロザムステッドがどのようなところか見たいと思っての訪問であり、アポイントもしていなかった。しかし、ふと、ロナルド・フィッシャーに縁のある物を見ることができたらと考えたのである。たしか、機械式の計算機があったのではないかという記憶²³⁾を思い出していた。私の訪問に対応してくれたスタッフに自己紹介をし、ロナルド・フィッシャーの遺品があれば見たいことを伝え、可能であれば機械式計算機を見ることができないかと尋ねた。スタッフはその場で連絡を取ってくれたが、機械式計算機はすぐに見せることができないように保管しておらず、あいにく担当者が不在であるとのことであった。私はアポイントをとり再び訪れることを伝えた。スタッフは図書館になんらか資料があるかもしれないことを教えてくれた。

図書館はロザムステッド研究所の入り口ともいえる場所に位置していたラッセルビルディング (写



写真18 ラッセルビルディング (2階に図書館がある)

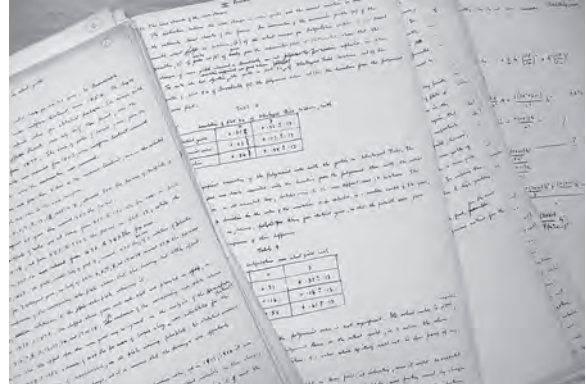


写真19 ロナルド・フィッシャーの手書きの原稿



写真20 フィッシャー・ビルディング



写真21 フィッシャー・ビルディング, ビル名サイン部分のアップ

真18) の2階にあると教えられた。

古めかしい外観とは異なり、図書館の中は明るく、そして美しかった。シンプルなデザインながら重厚感のある扉を抜けて入った図書室は、白色を基調としたコーディネートがされ、そこに施されたクリーム色のモールディングがシックな風合いを出していた。私は図書館のスタッフにロナルド・フィッシャーに関わる資料を見たい旨を伝えた。図書館のスタッフはすぐに1冊の本を持ってきて私に手渡した。その本はロナルド・フィッシャーの娘である Joan Fisher が記した“R A Fisher The Life of a Scientist”であった。私はさらに、ロナルド・フィッシャーの手書きの論文原稿などの資料を保管していないかをたずねた。すると、しばらくして、ロナルド・フィッシャーの原稿だと言いながら、タイプや手書きの原稿の束を渡してくれた。手書きの原稿は筆記体で用紙の端から端までびっしりと文字や数字、そして表が書かれていた(写真19)。文を読んでみようとしたが、ほとんどが解読できなかった。私の英語力の低さのためかと思いながら、読むことができない、とつぶやくと、そばにいたスタッフは原稿を覗き込んで、少し笑いながら「私も読めないわ」と言った。

私は、資料を閲覧できたことを感謝し、図書館を後にした。

次に、ロナルド・フィッシャーの名を冠した建物があるとの情報を得ていた²³⁾ため、構内を車で移動しながら探した。農業試験場であるため、敷地は広大で、周りには農地が広がっていたが、程なくして目当ての建物を見つけることができた。建物の壁面に“FISHER BUILDING”と記された建物は、しかし、人がいる気配はなく、まるで倉庫のようであった(写真20, 21)。

ロナルド・フィッシャーの妻

さて、いくつかの資料を紐解いてゆくと、ロナルド・フィッシャーが、ギネス社に勤務していたウィリアム・ゴセットに初めて出会ったのは1912年、ロナルド・フィッシャーが22歳の時であると思われる。そして、ロナルド・フィッシャーがアイリーン・ギネスと結婚するのは1917年のことである。時系列的に見れば、ウィリアム・ゴセットがアイリーン・ギネスをロナルド・フィッシャーに紹介している可能性は否定できない。しかし、ある記述²⁾によれば、ロナルド・フィッシャーの妻はロナルド・フィッシャーの大学時代の友人の妻の妹であると記されている。そしてこの姉妹の父はDrヘンリー・ギネスであり、ロナルド・フィッシャーの妻となるアイリーン・ギネスが16歳の時に死亡したと書かれている。さらに、若くして結婚することに反対するアイリーン・ギネスの母に知らせることなく、アイリーン・ギネスが17歳の誕生日を迎えた数日後に結婚式を挙げたとのことである。このときロナルド・フィッシャーは27歳、アイリーン・ギネスとは10歳違いである。いや、年の差が問題ではなく、アイリーン・ギネスはギネス社となんらかの関係があったのか、もしそうであれば、統計学を中心としたウィリアム・ゴセットをはじめとする人々のつながりが、その関係を取り持ったのか、ということが疑問なのである。しかし、その答えを資料の中から見つけることはできなかった。

さて、ここまで話をしてきて、このアイリーン・ギネスとギネス社の関係を示すことなくこの文を終えることは許されないであろう。

実は、私はダブリンにあるギネス社を訪問する直前に、ギネス社宛にメールでアイリーン・ギネスとギネス社の関係を尋ねたのであった。私がメールを送った翌日、ギネス社公文書管理人であるロッシュ氏より回答が送られてきた。

そして、その答えは「ギネス一族の家系図にアイリーン・ギネスの記録はありません」というものであった。

統計学を軸としたロナルド・フィッシャーとアイリーン・ギネスの出会いという仮説は儂くも棄却されてしまったのである。

しかし、それでも疑ってみたくなるのが研究者である。もし、ロナルド・フィッシャーに尋ねる事ができるのならば、私は、私の仮説は棄却されたようですが危険率はどれくらいですか、と尋ねるだろう。

付記

文中に登場した人々の記録については、文献として示した書籍およびインターネットの情報をもとに記述をした。文献間で記載内容に相違が見られる場合もあり、そのような場合は総合的に判断して記述した。そのため、それぞれの引用元を明確に区分することができず、十分に引用を示すことができていない場合がある。

もし、歴史的な内容の記述に誤りがあるようであれば、引用した文献の誤りではなく、著者の理解が充分でなかったことによるものであり、著者の責任である。

写真注：論文中に用いた写真は著者が2006年から2007年にかけて撮影したものである。写真7は2010年に渡英した際に撮影した。

文献

- 1) Ronald Fisher: https://en.wikipedia.org/wiki/Ronald_Fisher (2016/5/21 アクセス)
- 2) Sir Ronald Aylmer Fisher: <http://www-groups.dcs.st-and.ac.uk/~history/Biographies/Fisher.html> (2016/5/21 アクセス)
- 3) 岡崎陽一：人口統計学，古今書院，東京，増補改訂版，1-24，1999
- 4) 安藤洋美：多変量解析の歴史，現代数学社，京都，初版，53-56，135-140，1997
- 5) Karl Pearson: https://en.wikipedia.org/wiki/Karl_Pearson (2016/5/21 アクセス)
- 6) English Heritage, Blue Plaques: <http://www.english-heritage.org.uk/visit/blue-plaques/> (2016/5/21 アクセス)
- 7) Daniel P. : 片岡信 (訳) : 19世紀のロンドンはどんな匂いがしたのだろう，青土社，東京，第1版，316-324，1997
- 8) 角山榮，川北稔 (編) : 路地裏の大英帝国—イギリス都市生活史—，平凡社，東京，初版，147-168，1982
- 9) Hughes K. : 植松靖夫 (訳) : 十九世紀イギリスの日常生活，松柏社，東京，初版，48-59，1999
- 10) Northern line: https://en.wikipedia.org/wiki/Northern_line (2016/5/21 アクセス)
- 11) Mitchell R. J., Leys M. D. : 松村起 (訳) : ロンドン庶民生活史，みすず書房，東京，第1版，184-186，1971
- 12) 谷田博幸：図説 ヴィクトリア朝百貨事典，河出書房新社，東京，初版，98-101，2001
- 13) UCL BENTHAM PROJECT: <http://www.ucl.ac.uk/Bentham-Project/who/autoicon> (2016/5/21 アクセス)
- 14) 見市雅俊：コレラの世界史，晶文社，東京，第1版，200-237，1994
- 15) Porter T. M.: Karl Pearson: the scientific life in a statistical age, Princeton university press, Oxford shire, 1st ed, 84-90, 2006
- 16) Salsburg D. S. : 竹内恵行，熊谷悦生 (訳) : 統計学を拓いた異才たち—経験則から科学へ進展した一世紀—，日本経済新聞社，東京，第1版，1-76，2006
- 17) The History of Guinness: <https://www.guinness.com/en-gb/our-story/> (2016/5/21 アクセス)
- 18) Guinness: <https://en.wikipedia.org/wiki/Guinness> (2016/5/21 アクセス)
- 19) Fisher, Sir Ronald Aylmer (1890-1962): <http://www.english-heritage.org.uk/visit/blue-plaques/fisher-sir-ronald-aylmer-1890-1962> (2016/5/21 アクセス)
- 20) A Blue Plaque for Ronald Fisher's Childhood Home in Hampstead: <http://www.economics.soton.ac.uk/staff/aldrich/fisherguide/blueplaque.htm> (2016/5/21 アクセス)
- 21) Inverforth House: https://en.wikipedia.org/wiki/Inverforth_House (2016/5/21 アクセス)
- 22) Rothamsted Research: https://en.wikipedia.org/wiki/Rothamsted_Research (2016/5/21 アクセス)
- 23) 芝村良：R. A. フィッシャーの統計理論—推測統計学の形成とその社会的背景—，九州大学出版会，福岡，初版，25-60，2004